

坂部支隊

坂部貞兵衛をトップとする坂部支隊は、天草上島の北側筋を東上し、大矢野島までを測量した。

《測・坂部支隊》

メンバーは坂部貞兵衛、青木勝次郎、永井要助、平助、助八、又兵衛、新助。

サポートは、付廻り大庄屋庄屋、吉田長平（上村大庄屋）
酒井平太兵衛（都呂々村庄屋） 橋口嘉左衛門（深海村庄屋）、
郡中竿取5名。

測量区域は、上天草（この所曰く、瀬戸上）北沿岸。

26日 11月11日（十月十五日）※

測地・測量無し

泊地・大島子村（天草市有明町）

《測・坂部支隊》

朝7時頃楠浦村出発。朝より雨強く、測量出来ず。

よって直ちに大島子村へ行き止宿。

宿・庄屋増田利三郎。

※益田の間違い。

《巡・坂部隊附廻日記》雨天。北風。

楠浦より両手に分かれて測量。伊能隊は下浦へ渡海。
その人数は左の通り。

伊能勘解由様

下河辺政五郎様

内弟子

梁田栄蔵様
箱田良助様

上田文助様

侍

松井沢治様

竿取

長蔵殿

伊能様仲間

清七殿

下河辺様仲間

兵助殿

上下9人

代官渡辺敬助様上下3人

附廻り

上田源作 上下

大堂作右衛門 上下

大谷小十郎 上下

上下6人

右の人数は下浦村へ渡海。

坂部様隊は志柿村へ渡海。瀬戸より測量予定。

その人数は次の通り。

坂部貞兵衛様

青木勝次郎様

永井要助様

竿取

坂部様仲間

青木様仲間

永井様仲間

ベ上下7人

附廻り大庄屋庄屋

吉田長平 上下

酒井平太兵衛 上下

橋口嘉左衛門 上下

ベ (記載なし)

右の人数、志柿村瀬戸へ渡海。測量をする予定で7時頃(六ツ半時)出発。出発時、小降りだった雨が乗船時より大降りとなり、測量は中止となった。そのため大島子へ行きそこで泊まり。6時頃(正六ツ時頃)

大島子に着く。

(原文では出発が正六ツ半時、大嶋子着正六ツ時となっている、時間的に辻つまが合わない。)

楠浦村庄屋並びに挽船、駕籠等、瀬戸へ向かい、大間違い。

諸荷物が風波が強い中、瀬戸迄漸く積送ったところ、人足間違いで遅れる。それより大宮地庄屋見習園田幾三郎上下人足、宰領1人留まる。大島子村から人足が荷物を取り寄せに来るが大遅れ、さらに荷物も多くが濡れ、不首尾。

郡絵図の件で17時頃下浦より飛脚が来る。

(この書簡の内容が長々と記してあるが、いまいち内容が理解できないので、原文のまま記す。読者の方で解読願いたい)

急飛脚を以申進候 然ハ一昨日伊能様御弟子箱田良助様方郡絵図為見候様被仰聞 竹四郎庄九郎方江郡絵図取ニ遣候処 所持之郡絵図急大ク候ニ付 竹四郎方使之者江申聞候者 坂部様御方江借用仕差上候様申聞候処、使之者坂部様御宿江参り 伊能様方絵図面取ニ参候段大宮地園田幾三郎殿江申達候処 右之趣を以坂部様江借用仕直ニ楠浦庄屋宅ニ使ニて遣候処 箱

田良助様御覽之上大堂作右衛門江御渡有之候ニ付 郡中廻大庄屋庄屋中所持之絵図面と存竹四郎江相渡申候処 竹四郎方庄九郎江相渡有之候趣御座候間 右絵図面大切ニ致此飛脚之者江御渡可被下候 右間違之義ハ前段之通伊能様江申上候間坂部様江書面之振合を以可然被仰上可被下候 右絵図面之義ハ以前伊能様江差上候小絵図ニ御座候 左様御承知可被下候 無間違庄九郎方御請取御遣可被下候 以上

十月十五日

庄屋中

大庄屋 庄屋 衆中

追而本文絵図之義伊能様方坂部様江御掛合御座候処 大宮地庄屋江御渡被遊候段伊能様江御報御座候 右ニ付此方御糺御座候間違ニ而庄九郎江絵図相渡置候義申上候処 則右之趣も伊能様方坂部様江御懸合御座候 今日之義ハ大間違以外被仰聞候 坂部様江間違之義呉々も宜敷被仰上可被下候 重々奉頼候己上

別紙ニ

今日其御方御手合ハ御改如何共御座候哉 為御知可被下候 此方ハ止方ニ相成申候 左様御承知可被下候 右之通申来候

伊能様より坂部様書状が届いたので、早速届ける。伊能様への返書は無し。

庄九郎が預かっている郡小図を飛脚へ渡す。

3人上下、竿取り1人宿・役座。

付廻り、大庄屋庄屋・専念寺。

郡中竿取宿・(不記載)

※専念寺 浄土真宗西本願寺派・創建寛永十年(1632)。

上田宜珍の「巡廻日記」にここから、12月7日(十一月十一日)まで、**(測量方坂部組附廻日記)**が付随している。これを誰が書いたのか明らかにしていないが、宜珍巡廻日記より詳しく記されている。宜珍でないことは確かで、筆者の名前が分かると嬉しいのだが。

なお、この最初の日の日付が「十月五日」となっているが、「十五日」の間違いである。

「仲間」は一般的に「中間」の事である。

※中間は仲間とも書く。脇差の着用のみ許される下層の武家奉公人、従者。最下層の武士であり、江戸幕府の職制としておかれた中間は、15俵1人扶持が与えられた。

(日本史辞典) 角川書店

ここで注目すべきは、伊能忠敬研究会 (Inopedia) では氏名不詳の坂部、下河辺、青木、永井の中間(従者)の名前が書かれている事である。

この意味からも、宜珍の巡廻日記が測量日記を補完しているといえよう。

忠敬・坂部支隊の二人の布団が、間違つて伊能隊の方へ運ばれていたことが分かり、慌てて布団を大島子村から下浦村まで取りに行かせている。これから分かるように、布団も、宿で用意するのではなく、測量隊が持ち運んでいたことが分かる。このエピソードも、付き添いの宜珍ならこそ記されているものである。また、この件は、坂部附き日記では、やや表現が違うが、より詳しくバタバタの様子が記されている。

宿泊した庄屋の名前が、測量日記では、増田利三郎となっているが、益田が正しい。

27日目 11月12日 (十月十六日)

測地・志柿村(天草市志柿町)

大島子村(天草市有明町)

泊地・大島子村(天草市有明町)

《測・坂部支隊》

志柿村瀬戸(瀬印)より始める。船江、畑尻、中塩屋、大

島子まで測る(7.3km)。

宿、前日同。

《巡・坂部附》曇り、北風。

7時大島子村役座下より開始。瀬戸迄測量。ここで昼食。

21時、下浦より菓子、蓑を飛脚がもたらす。

硯石1つ、墨1丁、桃灯1張調える。代金 $\text{¥}414$

文庄九郎が立て替える。

28日目 11月13日 (十月十七日)

測地・大島子村、小島子村、

下津浦村(天草市有明町)

泊地・下津浦村(天草市有明町)

《測・坂部支隊》

大島子より始め、鳶口、小島子村、下津浦村①印迄
(4・3 km)。

また②印より始め、横切り、下津浦村四枝、除石、草積峠迄測る(4・1 km)。別手18日に湯舟原より合測。合計9・9 km)。

宿・下津浦村庄屋原田伝左衛門。

《巡・坂部附》晴天、北風 泷※

6時大島子村出発し測量開始。

下津浦村より草摘峠(草積峠)まで横切り測量。

下津浦村泊。

3人上下、竿取り1人宿・役座。

付廻り衆宿・民左衛門。

郡中竿取宿・慶助。

大矢野組大庄屋 大島子より同日船にて帰村。

※泷の意味が不明。新潮日本語漢字辞典には、「波が当たる。また、波が当たる音。水が流れる音」とある。北風が吹いているところから、有明海の波が高いということだろうか。或いは波の誤記か。なお、大修館の漢語林には、「**国**なく。

静まる。波や風が穏やかなになる。」とある。相反する意味だ。伊能忠敬測量隊には泷という字に「なぎ」とルビがふつてある。普通並の穏やかな様は、風という字を用いる。31日目の書状(橋口、酒井付廻りから吉田大庄屋への返書)にも、「今日共風立候様子急ニ泷方ニ相見江不申」とある。この部分の翻刻文には、泷タギとルビがふつてある。

天草島原一揆緒戦の地

一般的に「天草島原の乱」と称される、天草島原一揆の緒戦の地が、ここ大島子である。一揆蜂起を知った、時の天草支配唐津勢は、この地まで出張り、天草一揆の戦いの火ぶたが切られた。

幕府を驚愕させた事件が、この地から始まったことを、忠敬は知ってか知らずか。ただし、忠敬はこのルートは辿っていないが。もともと、その一揆から、172年も経っているため、既に歴史の彼方の出来事ではある。忠敬どころか、当の天草島民でさえ、知らない人が多数であったはずだ。

ただ、この大島子村を始め一帯から1万3千人とも言われる住民がこぞって島原原城に移り、有明海沿岸の地は無人の地と化したため、当時の住民の先祖はほぼ全員が移住

してきたものと思われる。

ただ、一揆の影響は、170年後も無くなったわけではなく、キリシタンを恐れる幕府は、年一度全島民の宗門改め、つまり絵踏みが行われている。

一揆について、代官や付廻りは当然知っていただろうが、忠敬や坂部に教えることはなかったに違いない。

この大島子の戦いで勝利した一揆勢は、怒涛の勢いで、瀬戸海峡を渡り、本渡の戦いから富岡城攻防戦へと移る。このルートには、大島子に林兄弟の墓、本渡には千人塚（現在の千人塚は移設して建設）、本渡広瀬には、この地で討ち死にした唐津軍の総大将三宅藤兵衛の墓がある。

29日目 11月14日（十月十八日）

測地・下津浦村、上津浦村、赤崎村、
須子村、大浦村（天草市有明町）
泊地・大浦村（天草市有明町）

《測・坂部支隊》

下津浦村（下）印より始める。上津浦村下津江、赤崎村、須子村、大浦村まで測る（12.2km）。外に大浦村黒島一周測る（582m）。

宿・大浦村大庄屋小崎六郎左衛門。

《巡・坂部附》曇天、西風。

6時頃出発し測量開始。
昼食を赤崎村役座で摂る予定であったが、少し早かったので俄かに須子村役座になり、大混雑となる。
大浦泊まり。

3人上下、竿取1人宿・大浦役座。
付廻り宿・次郎兵衛宅。
郡中竿取宿・太郎右衛門宅。

30日目 11月15日（十月十九日）

測地・測量無し
泊地・大浦村（天草市有明町）

《測・坂部支隊》

雨。同所逗留。

《巡・坂部附》雨天、北東の風。

測量中止。
大矢野大庄屋より問い合わせの飛船が来る。



天草島原一揆
(天草島原の乱)
関連碑



上、林兄弟の碑 天草市有明町大島子
中 三宅藤兵衛の墓 天草市本渡町広瀬
下 殉教戦千人塚 天草市船ノ尾町 殉教公園

(概要) 今日雨が降っているが、測量は実施か中止か知らせてもらえば幸いである。念のため飛船を出す。なお、風波が強く、湯島へは渡海できない。そのため上村へ移動されるか、お知らせ願いたい。また、楠甫村は一向に用意が出来ていない。教良木村より21時頃年寄が問い合わせに来る。

大矢野組大庄屋吉田長平より、付廻り庄屋の酒井平太夫、橋口嘉左衛門宛てに、届いた問い合わせに、これから測量方を迎える側の気苦労が見て取れる。

またこのように、付廻りは二手に分かれた場合、互いに頻繁に連絡を取り合っていたことが分かる。

31日目 11月16日(十月二十日)

測地・雨のため無し

泊地・大浦村(天草市有明町)

《測・坂部支隊》

雨のため中止。

《巡・坂部附》雨天、北東風。

測量中止。

21時ころ大矢野より飛脚が来る。

飛脚便は、大矢野庄屋吉田長平から酒井、橋口付廻り庄屋当ての書状である。内容は、理解できない所もあるが、要約すると、今日も飛船を用意していたが、昨日測量中止との事承知。付いては万一当地へ渡海できない場合は、楠甫村、教良木村の測量を行って、同村へ泊まられるかどうか。教良木村の泊の用意は全くできていない。したがって、その場合は、楠甫村へ泊まりになるように伝えて欲しい。云々。

また、湯島へ渡海されるなら、それらの準備もあり、間違いがあつてはならないので、心配している。等々、長々と切々と、訴えている。

吉田長平は、付き廻り役となっているが、この時点で付廻りしているのは、酒井、橋口の二人で、吉田は地元で測量の手配をしていたのだろう。

これに対して、酒井、橋口氏からの返書があつている。返書も長く、理解不能の点もあるが、要は測量地や宿の手配等、心配しているので、連絡を密に取ってほしいと訴えている。

いずれにしても、天気が悪く、島も抱えているので、付

添として進捗、宿の対応（手配）を心配している様子がよく分かる。

長くなるが、原文を記すので、読み取れる人は、目を通していただきたい。

一夜四ツ時大矢野方飛脚到来 左之通

今日も飛船を以得御意候 然ハ昨日御改止方ニ相成候旨
御申越致承知候 付而ハ万一当地江御渡海難成天氣ニ御
座候ハ、楠浦教良木御改同村御泊ニ相成可申趣被仰間
候得共 教良木村御泊之用意一向無之候付 右様相成候
節ハ楠浦御泊ニ相成候様御斗被下度 尤右ニ付而ハ最早先々
江も御掛合有之候半 相決居候へ者宜御座候得共 今ニ
先方江御掛合も無之候ハ、前断之御通取斗可被下候

一雨天故今日も御改止方ニ相成候半と奉存候得共 若押而
御測量方御座候而明日湯嶋御渡海共ニ相成候得者 小子
共組元江居申候ニ付大間違可有之 依之亦々為聞合船差
立申候間委細御申越可被下候 且亦此方方飛脚差立申
候而ハ一日も相懸リ申候付 間違ニ相成申候間却而飛船差
立候得共 其御元方者飛脚御差立被下候而も間ニ合不申
候ニ付 万事手筈向相替候義も御座候ハ、不限昼夜飛脚
を以御申越可被下候 此先ハ飛船差立申候義見合可申候

是ハ得手勝手之義ニ御座候得共 右間違無之様御取斗
之程万々奉頼上候 小子も其御元江罷出可申存寄ニ御座
候得共 彼是村方も不行届義有之候付出役出来不申候

湯嶋ニ而御出迎可仕候得共 是迎も波立上村江御渡海共ニ
御座候得者行違ニ相成候間如何と心配罷在候ゆへ 乍
憚はばかり御役人様江程能被仰上可被下候 大浦村雨天ゆへ
御逗留ニ相成小崎氏さざ御世話被成候半是又宜御伝可被
下候 已上

十月廿日 吉田長平

酒井平太兵衛様

樋口嘉左衛門様

尚申 御一手之様子相分不申候哉 是亦御問合申候 己
上

右之通申来

返書

御飛脚拜見仕候 然ハ御察之通雨天ゆへ今日も御測量止
方ニ相成申候、雨晴候ハ、明日共ハ御測量と奉存候 今
日共風立候様子急ニつよ平方ニ相見江不申 左候得へ者貴地
御渡海之義難斗奉存候 付而ハ楠浦教良木之方御改御座
候と奉存候 昨日之御状楠浦御泊之義難出来候様相見候
ニ付教良木村江御泊之義申遣候尤海辺里数改見候処楠浦

御泊ニ相成不申候而ハ難成と奉存候へ共 御紙面之趣ゆへ
教良木村御泊ニ申遣置候間 定而右村ニも急々用意可有
之奉存候 若不宜御思召候ハ急飛脚を以被仰越候上楠
甫御泊ニ相成候様取斗可申候 且貴公様義幾日頃御出被
成候哉 度々坂部様方御尋御座候付御答申上候者 成丈
当地ニ罷出可申積ニ候得共 若御尋共有之候ハ湯嶋ニ而
御出迎可申様御答申上候様中残候段申上置候間 貴地
大体ニ御仕、廻被成候ハ御出可被下候

一天気次第様子相替リ候義も御座候ハ此方方飛脚を以可
申上候

一伊能様御手合今日迄一向通路無之候ニ付 明日者聞合之
ため飛脚差遣候積ニ御座候

一中原氏江飛脚便有之候ニ付是迄之様子申遣候
右旁御報如此御座候 早々已上

十月廿日 橋口嘉左衛門

吉田長平様

酒井平太兵衛

飛脚について

巡廻日記にも度々登場する「飛脚」。宜珍日記にも度々
出てくる。

飛脚すなわち江戸時代の郵便制度。いや制度としては確
立していないが、かなりの頻度で利用されていたことが分
かる。ということは、飛脚を仕事とする人がいたことを物
語っている。

飛脚はもともと幕府の公文書を運ぶ継ぎ飛脚として始まっ
たようだが、さらに大名飛脚、さらには民間の飛脚が発達
してきた。これらは、飛脚屋とか飛脚問屋などと呼ばれ、
民間でも、商人を中心にかなり普及してきたようだ。

飛脚は、単に書状を運ぶだけでなく、小荷物や金銭も運
んだらしい。ただし、今日の郵便のように一般民間人が頻
繁に利用するまでには至っていない。

ただ、天草に於いても、宜珍日記に見るように、役所と
大庄屋・庄屋間、あるいは大庄屋と庄屋間等の継触等に、
頻繁に利用されている。ということは、飛脚を仕事とする
専門職がいたことになろう。

継触れとは、役所から各村へ通達や連絡を取る場合、一
斉に各村に出すのではなく、まず大庄屋へ連絡を行い、そ
れを大庄屋は、各村へ伝えることだ。ただしその場合も、
各村へ一斉に出すのではなく、まず近い村へ出し、その村
は、コピーして、近くの村へ出す、ということを繰り返す。
現在の言うところ、回覧板とも言えようか。コピーすると
いっても、現在のようにコピー機にかけて、一瞬のうちに

複写することはできず、一字一句筆写する必要があった。したがって、役所から通達をしてから、末端まで届くのは、ずいぶん時間がかかった。それでも、現在のようにこせこせしていない時代のこと、そのスピードで十分だったのだろう。

もし仮に、飛脚を仕事とする人がいたとして、中央ならともかく天草で、生活が成り立つほどに、量があり、かつ収入があつたのかどうか、全くもって分からない。

宜珍も、度々飛脚便を頼んでいるが、その料金や飛脚そのものに対する記述は、筆者の知る限り記していない。

ただ、この忠敬の測量の付添役間等で、頻繁に飛脚を利用している。しかも真夜中でも配達しているところから、それ専門の飛脚がいたようでもある。

忠敬も旅先から江戸へ、たくさんの書状を送っている。その書状の一部が、『伊能忠敬書状』として、一冊に纏められている。これを見ると、当時の飛脚〈制度〉が、しっかりと確立していたことが分かる。ただし、その伝達スピードはかなり遅かった。旅先から江戸の指定地点に送る場合でも、多くの日数を要したことは容易に想像できるが、旅先に送る場合は、さらに多くの日数を要した。何しろ、どこそこあたりにいるとは分かっていたとしても、どこにいる

というはつきりした地点が分からないためだ。

それは、宜珍が事前打ち合わせのため、薩摩に渡った時のことを考えると、よく理解できる。

しかし、日数は掛かっても、確率的にはどうか分からないが、ちゃんと相手に届くという、精確さは、江戸時代と雖も、日本の持つ文化の高度化を示す事かもしれない。

さて、前出の『伊能忠敬書状』の解説によると、娘の妙薫が九州第二次測量の時に出した書状は、途中経過を経ているとはいえ、二月に出した書状が、忠敬の手元に届いたのが八月と数カ月を要している。

もつとも、料金を出せば、かなりの伝達スピードを持っていたようである。現在でも速達という便があるが、当時も江戸・大坂間が並便、早便、十日限、六日限、さらには四日限とかがあつたという。普通便なら、半月かかるものが、最速なら4日で着くという。

ただしその料金は半端なく、並便で銀1匁が、四日限だと、4・5両というから、驚きだ。これは、江戸の大工の月収、2ヶ月分に相当するという。並便だと、銀一匁、すなわち60分の1両。

普通日常の事を未来の人に伝えるために、その当時のことを記録することは、現在でもあまりない。この宜珍に

しろ、忠敬にしろ、ただ淡々と記録しているが、現代人からすると、もっともっと詳しく記録してくれたらと思う。

それを補うのが、幕末日本が鎖国政策を転換し、欧米人が神秘の国日本に滞在し、そこで見聞きした貴重な記録だ。その中の一つ。オールコックの『大君の都―幕末日本滞在記』岩波書店 には、日本人が当たり前として、何も記録していないことが、西洋とは異なる、ある意味不思議な国の様子が描かれている。

その中の飛脚（郵便）に関するのが以下の文。ただし、本文はひらがなが多用され読みにくいので、筆者にて漢字へ改めた。

カモガワ
鈴鹿川に近くなつた頃、非常に大規模な濠と狭間はざまを設けた壁を持つ城「亀山城」を過ぎた。私は、郵便が来たら京都で私に届くように、江戸から早便を送れと命令してあつた。そして、私がいま通っている道を辿つて公文書を私にに渡すようにという命令を持って、すでに一人の飛脚が京都へ送られていたが、私の方では、途中何かの手違いがあるかも知れぬとは思っていた。公文書が京都で止められているかも知れぬし、あるいは私の居所が分からぬかも知れぬと考えていると、**腰に布をまとつただけ**

の二人の男が駆け寄ってくるのを目にした。そのうちの一人は、肩に注意ぶかく包んだ小包をかつぎ、そして誰も皆彼のためにすぐ道を空けていた。こういった点から見て、政府の公文書を持った早便だということが、私にはすぐ分かった。そして、私宛てかも知れぬと、ちよつとのあいだ思つてみたりもした。だが、彼らは、我々の方を見もせず、とつとと駆けていった。そこで私は、たいへん苦勞して騎馬の役人をやつて問わせたところが、彼らは「大君オウギンの政府から京都ミヤコの政府へ公文書を運んでい

る早便」だとのことだった。こういう返事を聞いても、まったく納得のゆく訳のものではなかった。私宛ての文書を持っている飛脚は、政府の官吏によつて京都へ送られ、自分は政府の公文書を運んでいるのだと思うだろうから、私の側を駆け過ぎていったのは、やはり私あての手紙かも知れないからだ。それから、何日も経つて、江戸から実際に使が届いた時になつて始めて、私はこの点について安心することができた。飛脚たちは、短距離を隔てて設けてある宿駅で交代し、**万一事故に会う時のことを考えて、いつも二人でゆく。彼らの速度は、たいそう早くて、江戸から長崎や箱館へゆくのに、嵐のために川や入り江を渡ることが出来ない**というようなことがなければ、約三五〇里すなわち八五〇マイルを九日間走

る。そして、普通は遅れないし、信頼するに足る。私の知っている限りでは、ただ一度だけ、神奈川から江戸へ走らせていた私の飛脚が英文の手紙を持ったまま姿を消したことがあった。これについては、政府から弁償して貰えなかったし、どうなったのか知ることもできなかった。ところで、このようにして長崎まで早便を送ると、費用は普通は小判二〇枚、すなわち六ポンドである。

(中巻P121-123)

道路から目を転じて、郵便局・郵便・電信・敏速な運送を含む広い意味での人為的な通信手段ということになると、ヨーロッパの最も遅れた国よりもはるかに遅れている。鉄道と電信については、支配者は話にも聞き、アメリカやプロシアの使節が持ってきた動く模型によっても知っているが、国内ではまったく考えられもせぬ。公共の馬車はない。いや、そもそもどんな種類の馬車もない。あるのはただ牛が曳く天皇ミカドの車と、人の肩に載せて運ぶ普通の旅行用のまったく面倒なものだけである。

実際、日本のあらゆる旅の普通の速さは、一日に五里ないし一〇里(一四ないし一八マイル)である。徒歩や馬リボンや乗物でゆけば、五里というのが普通の距離であって、緊急の場合でなければ、めったに一〇里もゆくようなこ

とはない。徒歩の人間や、荷を連ぶ動物が荷物を積んでついてこれるよりも速くへ、あるいはそれ以上早く、旅することはできない。私のした旅でも、私自身はちゃんと馬に乗っていたが、二五マイルが限度で、しかも数日も続けてその早さでゆくことはできなかった。郵送はすべて飛脚が行なう。政府の飛脚使は、宿駅の間を一定の期間を置いて走っていて、江戸と北の端の箱館ないし南の端の長崎との間を、おおよそ二五日でゆく。距離は箱館までは二九〇里(約六五〇マイル)、長崎までは三五〇里(約八七五マイル)である。急使だと、八〇分、すなわち六ポンド払えば、九日か一〇日で手紙が着く。このように、世界でも最良の道路を持っておりながら、通信の速度と手段に関する点では、彼らは他の文明世界に三世紀も遅れている。しかもこの非常に原始的な郵便も、人々の必要にはなんの関係もなく、政府とその役人の間の連絡を保っておくのに役立つだけである。商人は彼ら同士で組んで、一つの交易市から他の交易市へ急便で飛脚を送る。しかし私の知りえた限りでは、それは定期的なものではないし恒久的な形態のものでもない。この点では中国人ですら日本人に優っているように思われる。なぜなら、中国北部のたいいていの大都市には人々が設置した、あるいは人々々のために商人のギルドが設

置した常備の宿駅があるからだ。(下巻p174-175)

(太字は筆者・カタカナルビは原文)

32日目 11月17日(十月二十一日)

測地・大浦村(天草市有明町)
泊地・大浦村(天草市有明町)

《測・坂部支隊》

大浦村より始め、新地、小畔まで測る(4・4km)。
大浦村竹島一周(1・6km)、釘島(埋立で島でなくなっている・水車)一周(5・6km)。
宿は前日同。

《巡・坂部附》晴天、北風強く吹く。

6時より測量始まる。

- ①内野河内村庄屋岡部新左衛門出伺い。
 - ②18時頃、大矢野大庄屋より問い合わせの飛脚が来る。
 - ③18時頃、楠甫村年寄問い合わせのため参る。
 - ④22時頃、教良木村より問い合わせのため飛脚が来る。
- 明日の様子が分からないので、この夜は留め置き、二十二日6時頃乗船(測量隊の)を見届け帰る。

⑤大矢野組大庄屋、湯島より問い合わせのため飛船で参り、直ち(15時)に帰る。

33日目 11月18日(十月二十二日)

測地・大矢野上村(上天草市大矢野町)
泊地・大矢野上村(上天草市大矢野町)

《測・坂部支隊》

大矢野上村湯島(また、談合島という。人家多し)一周測(3・4km)、野釜島(人家あり)一周測(3・3km)。
宿・大矢野上村大庄屋吉田長平。

《巡・坂部附》晴天、東風。

6時大浦村を出発。

恵美酒ノ鼻(伊能図では蝦子崎となっている・大浦の右の半島)より乗船し、湯島へ渡海。湯島と野釜島を測量。
上村へ15時頃着き、宿泊。
①三人様上下竿取1人宿・役座。
付添宿・新屋敷小池多門宅。

郡中竿取宿・村会所。

② 登立、今泉、合津庄屋出伺い、登立庄屋はすぐに帰る。

湯島

湯島は、島原と大矢野島のほぼ中間に位置する。天草島から見ると台形状のこの島はウイキペディアによると、面積0・52km²、周囲6・5kmとなっている小さな島である。ただし、伊能測量によると、一周31町10間5尺となっており、これをメートル法に換算すると、3・4kmとなる。ずいぶんの違いだ。そこで国土地理院の地図で、簡易的に測定したら、伊能測量に軍配が上がりそうだ。恐るべし伊能忠敬、というよりお粗末な現代人と結論。

この島は、天草島原一揆で、天草、島原のリーダーたちがこの島に集い、作戦を練った島として知られる。そのため、「談合島」とも呼ばれている。

島の頂上は意外に広く、遺跡公園と共に、有名な湯島ダイコンの畑がある。このダイコンの品質は、桜島ダイコンと同じように、土質の関係でこの島でしかできないという。このダイコン、何時頃から作られるようになったのだろうか。

ところで、温泉もないのに、なんで湯島と名が付いたかという疑問がわく。それは、この島は火山島で、石だらけの島だったため、石島が湯島に転じたという説がある。

《島の説明板》

談合の跡 湯島公園

大矢野町史跡

談合島とは湯島の別名である。

寛永十四年十月二十五日有馬に変わがおこるや、十一月一日信徒代表大江源右エ門は大矢野に至り、益田四郎時貞を救主に仰ぎ君主の礼をもって迎えた。

四郎は、森宗意等首脳部五十余人とともにこの島に上陸し、戦略の秘策を談合した。又天草の各地の信徒幹部は、たくみに潮流の干満を利用して集まり談合したり、武器の製造をした。世にこの島を談合島と所以である。

平成七年十二月吉日

上天草市教育委員会

34日目 11月19日(十月二十三日)

測地・大矢野上村(上天草市大矢野町)
泊地・大矢野上村(上天草市大矢野町)

《測・坂部支隊》

大矢野（三ヶ村始める）上村江樋（江樋戸）より始め、
鳩ノ釜、七ツ割まで測る（この日風雨、途中で止める。
3・2 km）。
前夜同宿。

《巡・坂部附》雨天、北西の風。

6時江樋戸より測量を始める。朝の間は天気やかであつたが、10時頃より雨風が激しくなつたため、七ツ割というところまで測量し、上村へ引き返す。
上村泊まり。

35日目 11月20日（十月二十四日）

測地・中村、登立村（上天草市大矢野町）
泊地・登立村（上天草市大矢野町）

《測・坂部支隊》

この日北風強く。
昨日残り分は測り難く、東側を測る。中村明神ヶ浦始める。登立村治郎田、淵ヶ浦、大方、四郎丸、尾越崎、山下、新田まで測る（8・6 km）。

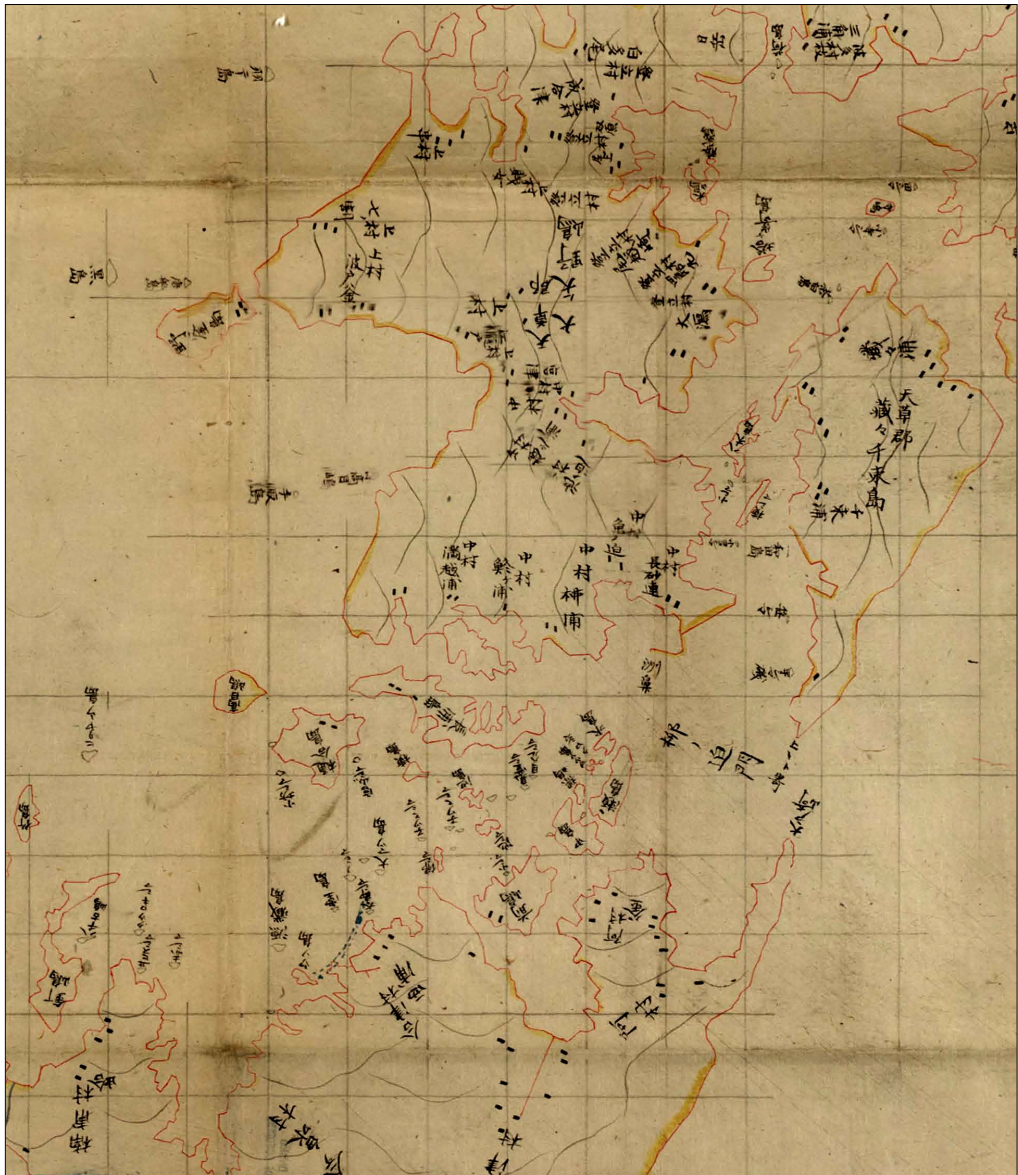
外に陶ヶ島（現在干拓で島ではなくなっている）一周（1・2 km）。

宿・登立村庄屋三井為右衛門。
代官様宿・松右衛門宅。
付廻り庄屋宿・丸太 和吉宅。
竿取宿・紺屋宅。
今晚は西風かつ冷氣強し。

《巡・坂部附》朝曇天、西風強し、少し雨が降るが、

9時頃より晴れる。
6時頃上村出発。
越ノ浦より登立の内まで測量。上村七ツ割より測量予定のところ、余りにも風波が強いため、測量を止め登立村へ泊まり。
①今泉村庄屋帰村。（岡部九郎左衛門・10月22日出伺い）
②三人様上下、竿取1人宿・役座。
付添宿・祐兵衛宅。
郡中竿取宿・祐作宅。

※測量日記は、坂部宿を「止宿 登立村三井為右衛門」と記しているが、光瀬の誤り。巡廻日記の11月26日には、「（登立村庄屋）光瀬牧吉出伺」と記している。また、



伊能大図 第九十六部分 大矢野島と天草松島付近
提供・イノペディアをつくる会 伊能忠敬史料館

http://www.inopedia.tokyo/02dataRm/inoh_map_check/daizu/196.pdf

「天草近代年譜」にも、歴代登立村庄屋は「光瀬」となっている。名前の「為右衛門」「牧吉」が同一人物であるのか、どちらかが誤りかは分からない。近代年譜の文化二年には、光瀬為右衛門の名がある。

また天草島鏡には、定免に関する村勢の中で、登立村庄屋は光瀬富太郎27歳となっている。

36日目 11月21日（十月二十五日）

測地・上村、登立村（上天草市大矢野町）

泊地・登立村（上天草市大矢野町）

《測・坂部支隊》

19日打ち止めた七ツ割より始める。上村串、女鹿ノ串、賤女（賤之女^{シノメ}）、登立村広崎、成合津（成合津）、瀬平崎まで迄測る（11・3 km）。

宿泊。前夜同。

《巡・坂部附》 晴天、北風。

4時に上村の七ツ割というところへ駕籠で行き、それより測量。

①阿村庄屋出伺い、直ちに帰村。

②上村、登立村、中村の本郷支郷の家数か何軒かの書付を差し出すよう申し受ける。

③深海村（付き廻り庄屋橋口嘉左衛門の村）より年寄代他1人来る。書状到来19時。

④10時、大浦村（栖本組大庄屋）より飛脚到来。楠甫村へ渡海の日程問い合わせのため。

⑤中村より年寄2人、10時に来てすぐに帰る。

37日目 11月22日（十月二十六日）

測地・登立村（上天草市大矢野町）

泊地・登立村（上天草市大矢野町）

《測・坂部支隊》

登立村瀬平崎より始め、白戸、岩屋、別当、双原まで測る（11・6 km）。

宿前夜同・三泊。

《巡・坂部附》 曇天、南風。

6時頃瀬戸ノ平というところまで駕籠で行き、それより測量。登立新田土手残り梵天まで測量予定のため、昼食は双原で取る予定であった。さらに岩谷になった

が、少し延びる。

双原新田手土手まで測量予定であったが、雨が降り、ここままで中止になる。

17時より大雨、夜半には風も吹く。明日の測量はどうか。明け方より少し晴れる。

38日目 11月23日(十月二十七日)

測地・登立村(上天草市大矢野町)
泊地・上村(上天草市大矢野町)

《測・坂部支隊》

登立村双原より始める。20日打ち止した新田まで測る(1・5km)。

登立村木島(鬼島)一周測(1・7km)。藤九郎島一周測(249m)。

この日、たびたび雨。

千束蔵々島に止宿・蔵々島百姓彦兵衛。

《巡・坂部附》曇天、西風。

7時登立出発。双原新田残り梵天より本郷新田を残し、梵天まで測量。それより船で島へ渡り測量。それより

蔵々へ渡海。蔵々島も測量して泊まりの予定であったが、10時頃雨風激しくなり、直ちに蔵々島の宿に入り、昼食。それより休み。

①三人様上下宿・蔵々年寄松兵衛宅。

付添宿・弥兵衛宅。

江戸竿取宿・平右衛門宅。

郡中竿取宿・喜与平宅。

②大矢野組大庄屋より、教良木村、楠甫村の測量に付き問い合わせの書状を遣わす。

③合津村へ帳面を遣わす。また阿村帳面も一緒に遣わす。これは登立箱に入れ、郡方桐箱に包む。

④坂部様の駕籠が登立船で大破損する。そのため、酒井平太兵衛、橋口嘉左衛門両人が謝りをしたところ、お許しになる。登立庄屋役人を留め置き、登立より大工二人を呼び寄せ修繕する。言語道断のことである。

※坂部宿が、《測》は彦兵衛、《巡》は松兵衛と食い違っている。

測・坂部支隊付きの巡廻日記は、宜珍巡回日記に比べ、大変詳細に書かれているが、その分理解できない所も多い。したがって、読み下しに誤りがあることも多いと思うが、

正確を期したい人は、ぜひ原文に接してほしい。

また、季節は11月も後半に入った。日記にも天気の良い日が多い。気温は測定する機器がなかったこともあるが、記されていないが、寒くなりつつある時期である。特に天気の悪い日は、かなり冷えたのではないだろうか。

ちなみに、昨年(2015年)の11月下旬の平均気温(天草本渡)は、8℃〜16℃である。

39日目 11月24日(十月二十八日)

測地・上村(上天草市大矢野町)
泊地・上村(上天草市大矢野町)

《測・坂部支隊》

大矢野上村千束蔵々島(維和島)の蔵々浦、千束浦を測る(16・8km)。同所を再測。

《巡・坂部附》晴天、北東風。

6時に測量始まる。

- ① 登立村庄屋帰村。
- ② 蔵々千束一日で測量終わる。
- ③ 14時頃に阿村より飛船来る・樋島より附添いの上田

源作、大谷小十郎より伊能様測量隊の測量状況報告書
状持参。

内容は省略するが要旨は。

① 伊能隊のこれからの予定と合津で合流する予定のため、その折の打ち合わせ。

② 平井氏(志岐村庄屋)は、今日まで出てきていない。中田村庄屋大堂氏が引き取った以後、宮田村庄屋中村氏も病気でまだ見えていない。我等二人とも心配している。

③ 浦村で痢病が流行し、小松氏(浦村庄屋)の息が死去し、外に3人の子供も患いついている。小松彦右衛門氏も同病の様子。村では28人この頃病死したと、聞いている。横切りでこの地を測量する際は、立ち寄らないようにして、直ちに御所浦島へ渡海するようと、代官も言っている。浦へは、宿手当を支払う必要はない。そのため、内野河内より姫浦へ横切りのため、道を作るよう仰せられた。姫浦より御所浦へ渡海するつもりでおられよ。何れも間違いないように取り計られるべし。

- ④ 阿村より問い合わせの飛脚あり。
- ⑤ 中村より問い合わせの飛脚来る。年寄来る。

大谷・上田よりの書状は次の通り。

一筆啓上仕候 各様弥御安康被成御勤役奉珍重候 私共無異ニ相勤罷在申候 然ハ昨晚方樋嶋御泊リ 明廿八日迄当所御改相濟 廿九日二間戸御泊晦日姫浦御泊 来月朔日阿村御差入之積ニ御座候 今日右村方問合ニ相見江候ニ付委細申談遣候 御聞可被下候 其御元ニ而も朔日ニ楠甫ニ御差入ニ相成候由 左候ハ合津ニ而御出会ニ相成候哉 又ハ御一手ハ横切被遊候御手筈ニ可相成哉 此段者可然様御手筈被成置可被下候

一平井(志岐組大庄屋) 氏今以御出無之 中田(大堂作右衛門) 引取以後宮田(中村清右衛門)も相痛今以相見不申私共兩人ニ而何歎心配而已ニ御座候 当組之義宮田(村) 引込之上浦村御所浦村病氣 別而不揃之様子諸事心遣多御座候 御察可被下候

一浦村痢病流行 頃日小松氏子息死去外二兩三人子共煩ひ付 彦右衛門(浦村庄屋・小松) 殿ニも同病之様子ニ御座候 村方ニ而廿八人此頃間も無ク病死有之趣相聞候間 横切被遊候ハ、御立寄無之様御積被成直ニ御乗船御所浦江御渡海ニ相成候様有之度御代官ニも被仰浦江ハ御宿手当ニ及不申段被仰遣候 然所内野河内方姫浦江横切被遊候御様子申来道造り致候趣被申出候付 右村方御所浦江

御渡海ニ相成候御積ニ御座候哉 何れ無間違様御取斗置可被下候 先ハ右之段為可得御意如此御座候 以上

十月廿七日夜

大谷小十郎

吉田長平様

上田源作

酒井平太兵衛様

橋口嘉左衛門様

※○は筆者

現在は維和島と称する千束蔵々島。位置は大矢野島の東に位置する。その大矢野島には三ヶ村があったが、千束蔵々島の側の村は登立村と中村である。したがってどちらかの村に属しそうだが、なぜか上村に属していた。

この島の蔵々地区は天草四郎の生誕の地との説もある。

40日目 11月25日(十月二十九日)

測地・中村(上天草市大矢野町)

泊地・中村(上天草市大矢野町)

《測・坂部支隊》

中村明神ヶ浦より始める。中村越ノ浦、池ノ迫、長砂

連迄測る(6・4 km)。

外に洲先片側測(529 m)、八木島(野牛島)一周(2・3 km)、小八木島一周(463 m)、横島一周(1・3 km)。

宿・中村柳浦百姓黒右衛門。

《巡・坂部附》朝曇天、東風

4時蔵々出發。屋ぎ島(野牛島)まで行き、そこより測量開始。柳の前長砂連ノ鼻まで測量して終わり。

①楠甫より内野河内迄急廻し状を出す。

②阿村より今泉村迄急廻し状を出す。

③吉田長平帰村。酒井平太兵衛腹痛で難儀。

④14時着く。

三人様上下竿取一人宿・(柳)九郎左衛門。

付き廻り宿・(柳)運平宅。

郡中竿取宿・同、喜三右衛門宅。

現在のように、時計がない時代、おおよそで時刻を見ていたので、測量日記と巡廻日記でもやや違う。また、時刻表示が、一刻に幅があるので、現在時刻に正確に換算するのは不可能。

名前も、例えば黒右衛門(測量日記)と九郎左衛門(巡廻日

記)と違っている。地名も八木島(測量日記)と屋ぎ島(巡廻日記)のように、違いが散見される。

41日目 11月26日(十月晦日)

測地・中村、上村(上天草市大矢野町)

泊地・中村(上天草市大矢野町)

《測・坂部支隊》

中村長砂連より始める。

柳浦、満越、江後、宮津、上村江樋(19日始め)まで測る(16・3 km)。

止宿・中村庄屋浦本栄左衛門。

大矢野島三カ村一周、合計58・9 km。

《巡・坂部附》朝曇り晴天 東風

5時柳出發。

長砂連内の梵天より測量始める。

①酒井平太兵衛(都呂々村庄屋)少し病気のため、陸路で柳より中村へ来る。

②吉田長平(上村大庄屋)中村へ出勤する。

③光瀬牧吉（登立村庄屋）出伺い。

④三人様上下竿取一人宿・役座

付添宿・岩助宅。

郡中竿取宿・庵。

遺跡と古墳

長砂連という地名が出てくるが、この名は装飾古墳として有名である。

天草にはいつの時代から人が住み始めたかは、明らかではないが、石器時代には住み始めていたようである。石器時代の遺跡は、久玉町内之原3ヶ所、倉岳町棚底1ヶ所、本渡2ヶ所の6ヶ所が分かっている。発掘の遺物はもつとも古い旧石器時代の物とされている。

以下遺跡・古墳を上げるが、遺跡・古墳の名称の頭のみ数字は、伊能忠敬天草測量の測量の目目である。本文と照らし合わせて確認していただきたい。

縄文時代になると、急に遺跡も増え、ほぼ天草全島域に分布し、現在200ヶ所ほどが確認されている。主な遺跡は、⑥深海町椎ノ木崎遺跡、⑳五和町二江の沖の原遺跡、㉒五和町御領の一尾貝塚、㉓本渡町広瀬の大矢遺跡などがある。

弥生時代は、天草が稲作に適した土地がないこともあり、少ない。

古墳時代の遺跡といえば、古墳である。

㉔本渡の妻の鼻古墳群、㉕桶浦町新田古墳、㉖天草上島下浦町須森古墳、㉗栖本町沖の瀬古墳、㉘倉岳町宮崎石棺群、㉙志柿町大松道古墳、㉚松島町阿村大戸鼻古墳、㉛長浦古墳、㉜上の原古墳がある。

大矢野島に入ると、急に古墳が増える。この地に集中しているといってもいい。㉝長砂連古墳、㉞維和島の千崎古墳、広浦古墳など。

その他多くの古墳があるが、残念ながら現存しても、当時そのままに維持されているのではない。

伊能測量時は、考古学という概念もなく（多分）、当然これらの古墳は発掘されていなかった。したがって、測量隊が、古代の歴史まで目を向けることはなかったにちがいない。

次ページに、天草の主な遺跡と古墳を伊能測量隊の測量道に沿って、表にしてみた。

（資料『改定版 天草の歴史』天草市教育委員会）

なお、WEBでは、「天草探見」を参照されたし。

天草諸島の主な遺跡・古墳

39	39	33	24	24	23	21	測量 目録
長砂連古墳	千崎古墳群	大戸鼻古墳	新田古墳	妻の鼻古墳群	大矢遺跡	沖ノ原貝塚	名称
大矢野町	大矢野町 維和島	松島町阿村	楠浦町	佐伊津町 (亀場町)	本渡町広瀬	五和町二江	位置
古墳時代	古墳時代	古墳時代	古墳時代	古墳時代	縄文〜弥生時代	縄文〜弥生時代	時代
装飾古墳	古墳	装飾古墳	古墳	古墳	遺跡	貝塚遺跡	種別
横穴式石室を持つ装飾古墳。直弧文と呼ばれる装飾文様が彫られている。	積石塚と箱式石棺。碧玉製の丁子勾玉や鉄製の斧など多数の副葬品が出土した。	北南の二基の古墳。二基共横穴式石室を持つ。南古墳の石室は赤く彩色されており、飛鳥のような文様が描かれている。	天草市内では最も当時の形を残している古墳の一つで、天井部がドーム型の肥後型横穴式石室古墳。	現在は、佐伊津に移転されているが、元は亀川にあった。	靫の圧痕のある縄文土器が発見され、稲作の起源が縄文時代から行われていたという発見がされた。	人骨、哺乳類、魚介類のやそれらの骨を利用したの装飾品や生活用品など多数の遺物が出土した。	特徴

42日目 11月27日(十一月朔日)

測地・合津村(上天草市松島町)

楠甫村、大浦村(天草市有明町)

泊地・楠甫村(天草市有明町)

《測・坂部支隊》

合津村高目(高李島) 島一周測(1・7 km)。同村樋合島一周測(人家あり、3・7 km)。

それより瀬戸上島(天草上島)へ移り、大浦村小畔より始める。楠甫村釜測(打ち上げ、741)。同所より横切り、(打上) 伝島、下村まで測る(834 m)。

止宿・楠甫村庄屋高木七左衛門。

《巡・坂部附》晴天 東風

6時中村出発。

合津村の高目島、樋合島測量。

それより楠甫へ渡海。大浦、楠甫境の梵天より測量開始。

楠甫高札場の上迄測量。

①三人様上下竿取一人宿・役座。

付添宿・年寄浅右衛門宅。

郡中竿取宿・光右衛門宅。

②今泉村庄屋(岡部九郎左衛門) 出伺い、直ちに帰村。

③教良木村庄屋(植村嘉左衛門) 出伺い、直ちに帰村。

④楠甫、教良木、今泉、内野河内4ヶ村の帳面(枝郷、本郷の家数書付)を上げる。

⑤市ノ瀬村より出ている綱引き(竿取)善左衛門が、家に病人が出たという書状が来たので、帰村の願いを出す。なお、銭50目借用の願いも出す。銭50目は浅右衛門宅より立替で渡す。善左衛門は暇乞いをする。

測量日記では、宿・庄屋高木七左衛門としているが、有明町史によれば、七左衛門は元庄屋であるという。それは、七左衛門が故あって引退、村政は大矢野組大庄屋吉田長平が兼帯、年寄役の浅右衛門、儀右衛門がみかじめを行っていたという。

43日目 11月28日(十一月二日)

測地・楠甫村(天草市有明町)

教良木村(上天草市松島町)

泊地・今泉村(天草市有明町)

《測・坂部支隊》

楠甫村釜より始める。蛤、教良木村長測まで測る（8・9 km）。

止宿・今泉村庄屋岡部九郎左衛門。

《巡・坂部附》晴天 東風

5時頃に楠甫村出發。新田土手に残した梵天より測量開始。

①阿村へ伊能様隊の測量の進捗問合せの飛脚を出す。

②伊能様附廻りの大庄屋、庄屋より返書が来る。（別記）

返書要旨

①今日は姫浦より阿村まで測量が済んだ。

②阿村釜へ宿泊しているが、明日の測量の予定は今だ不明。

③伊能様附廻り庄屋へ問合せの書状を送る。また、坂部様、平助殿よりの伊能様宛ての書状各1通送る。

返書が夜中3時頃来る。

④三人様、上下竿取宿・役座

付廻り宿・清兵衛宅

郡中竿取宿・勘次宅

伊能隊付きよりの返書は次の通り

御紙面致披見候 然ハ伊能様御手合 今日只今姫浦方当
村之内御改相済 釜江御泊相成申候間 明日之御測量場
所未夕相分り不申候間追々委細可申進候 先一寸御しら
せ申進候 已上

十一月二日

伊能様附廻り 庄屋 大庄屋中

坂部様附廻り 大庄屋 庄屋 衆中

伊能隊付きへ問合せの書状を出したところ、その夜中3時頃次の返書が届いた。

御飛札拝見仕候 然ハ伊能様今日阿村小崎鼻迄御改相済
御泊被遊候 明日ハ瀬嶋中嶋水嶋裸嶋御改之積ニ御座候
左候而地方海辺老里式丁余相残居候分 明後四日合津
村へ御出懸御改被遊候積ニ奉存候 坂部様も四日ニ合
津江御越御泊ニ相成候ハ、右御改方御積リハ其御元ニ而被
成可被下候

一下河辺様 先月廿九日二間戸御泊江御出かける御痛被遊

御風邪之御様子ニ御座候処 晦日姫浦江御泊方痾病之御様子ニ而今以御全快ニ相成不申御葉用御座候趣 尤医師高戸元陸と申仁付添居外ニ功者之衆此近村江居合不申伊能様方御葉方御差図被遊御用イ御座候 今日共ハ御快方ニ御座被遊候間 追々御全快被遊と奉存候 右御病中之義ニ付御別宿用意不仕候而ハ難成御座候間 其御勘弁ニ而先村江御取斗置可被下候

一 藤田氏も下シ腹ニ而今日当村方引取ニ御座候 大谷氏無拋向ニ而樋嶋方引取 只今ニ而ハ私老入御附添罷在申候 尤宮田を大谷替リニ仕居候へ共 砥岐組同役病人多有之御附廻之勤方出来不申 殊ニ下河辺様御宿ニも庄屋老入宛ハ詰切ニ仕 弥以拂底ニ御座候 御察可被下候

一 御所浦庄屋大病之由 元来行届兼候村柄弥以心遣ニ付 此方江も宮田遣不申候而ハ難成御座候得共 当村も同役中外村方外村御遣シ無之ニ付 宮田棚底今晚迄ハ留置申候

一 御所浦江ハ肥後御渡海前ニ 平井中原両御氏ハ御出候様御代官様 被仰聞候 一昨日双方共ニ飛脚差立申候

一 佐敷町ハ差支不申候へ共 同所入口つる木山と申所外一ヶ所抱蒼有之由相問候ニ付 今日御所浦方開合二年寄差遣候様申遣候弥右病有之候へ者 水主共ニ罷越候義出来不申候間 大矢野方右御渡海船御仕出候様仕度奉存候

御附添之義も貴公様御ふり替り被下 登リ立庄屋御同道被下候様と奉存候 浦村彦右衛門ハ子息兩人病氣大切ニ及申候趣ニ付參得申間敷奉存候

一 浦村御昼休ハ丈右衛門宅江用意仕候由申来候 右旁為可得貴意如此御座候 已上

十一月二日夜 上田源作阿村方
吉田長平様

御再書拝見仕候 当村御改之義ハ別書ニ委敷申上候通ニ御座候

一 坂部様方之御状早速伊能様江差上申候 外ニ平助殿方之書状是又相達申候

一 駕籠之義此方江二丁有之候

一 明後四日合津村江御越之節 当村庄屋ハ御本船御案内 外ニ御朱印長持積船江庄屋老入 下河辺様御乗船江庄屋老入無之候而ハ難成御座候間 内野河内ハ明晩ぶ此方江御遣可被成候 左候ハ、老入ハ砥岐組庄屋中之内頼置可申候

一 下河辺様御様子其外共ニ合津同役方御聞可被下候 以上
十一月二日 上田源作

坂部様附廻リ 大庄屋 衆中

伊能隊は阿村を測量中。坂部隊は今泉にいる。この間、現在では車で僅かの距離だが、当時はそこそこの距離である。また現在のように道路は無く、山道である。この日は坂部隊付廻りから、伊能隊付廻りへ2通の書状を違う時間に出している。出した時間は分からないが、二通目が届いたのが「其夜返書夜八ツ半頃参」である。八ツ半とは、草木も眠る丑三つ時、つまり深夜3時頃。いやはや、付き廻り役も大変だし、真夜中それを運ぶ飛脚も大変だ。しかも、陰暦二日なので、新月で月明かりも無く真つ暗である。救いは、晴れていたのと、季節も11月末なので、凍えるような寒さではなかったということだ。

深夜に届いた書状を、眠たい目をこすりながら、暗い照明の下で懸命に目を通す、庄屋さんの姿を思い浮かべると、宮仕への辛さに同情を禁じ得ない。

44日目 11月29日(十一月三日)

測地・教良木村・内野河内村・今泉村・

合津村(上天草市松島町)

泊地・今泉村(天草市有明町)

《測・坂部支隊》

教良木村長測より始め、ソノブ(園部)、星平、蔵人川(倉江川)(渡幅109m)、内野河内村、今泉村、合津村折尾まで測る(8・1km)。前夜と同宿。

《巡・坂部附》朝曇晴天 東風

又曇る又晴れる夕方曇る

5時今泉村新田土手より測量開始。

吉田長平合津村へ出張。明日両隊の宿手配のため。

合津村、内野河内村、楠甫村の懸合の飛脚を遣わす。

ただし内野河内の庄屋は今晚中に阿村へ出てくるように申し遣わす。

この他、合津村へ出張の吉田氏より、付き廻りの橋口、酒井兩人宛てに、書状が届く。内容は、合津村より人夫船を出すことが出来ないと言っている。また、合津村は案外の様子で当惑している。宿の手配も行き届いていない。

測量開始が測量日記では教良木村長測より始め、巡廻日記では今泉村新田土手より始めるとなっていて相違がある。巡廻日記にはその後の測量地が記して無い。

また、測量日記では、43日目の測止めは教良木村長測、

44日目の測始も同所となっているが、43日目の宿は今泉村である。教良木村と今泉村は相当の距離があり、合理的でない。教良木村に泊まらなかった理由は何だろうか。なお、47日目には教良木村庄屋宅へ泊まっている。

45日目 11月30日(十一月四日)

測地・合津村(上天草市松島町)
泊地・合津村(上天草市松島町)

《測・坂部支隊》

合津村横島一周(781m)、永浦島(人家あり、8・5km)。

16時頃合津村へ着く。

止宿・向陽軒。

両手合流。

此の夜雨。

《巡・坂部附》 曇天 東風

5時頃に今泉村出発。

新田土手より乗船。合津内長浦嶋へ渡海し測量。

伊能様は14時頃合津へ到着。

坂部様隊は、長浦嶋が難所のため漸く17時頃宿に着く。三人様上下宿・向陽軒。

付添宿・甚助宅。

郡中綱引宿・平吉宅。

教良木村より問合せの書状が届く。

今泉、楠甫へ明日の手筈の書状を遣わす。

教良木、楠甫より問い合わせのため一人が来る。

17時頃より雨が降り出し、終夜降り続く。

薩州より測量方御用に付き、兩人が来る。合津村に泊まる。

※向陽軒 伊能本隊45日目で解説。

天草上島激動の歴史

天草上島の北筋は、天草の他の地域と比べ、島もなく単調な海岸線なので、測量の進捗も早い。27日目に天草市志柿町から始め、33日目には早くも上天草市大矢野町へ入っている。

しかし、歴史に目を転じてみると、この天草上島北目筋は、天草の歴史の中でも、特筆すべきものがある。それも喜ばしいものではなく、人々にとっては苦心惨憺たる歴史であ

る。

まず、上げられるのが、天草島原一揆(天草島原の乱)の緒戦地であるということ。

戦いは、下島へ移るが、この地の人々は、こぞつて島原・原城へ渡り、玉砕している。この地の多くは、無人化となった様だ。

それは、同じ天草でも、下島の西目筋などでは、この乱に参加せず、その後の厳しい禁制下のなかで、潜伏キリシタンとして、しぶとく生き抜いた人々とは対照的だ。

やがて、無人化したこの地にも、幕府の移民策等により、徐々に人口も増え、乱当時よりも活況を呈するようになってきた。

しかし、この地には、第二の試練が立ち向かう。それは、寛政四年(1792)に雲仙眉山の崩落による大津波が発生したことだ。世にいう島原大変肥後迷惑である。この津波により、多くの人命を失ったことは勿論、折角築き上げた田畑の流失、家屋の損壊等で、多くの民人は、大変な被害にあった。北筋には、この津波による現地の死者だけでなく、流死者を慰霊する多くの慰霊塔が残されている。

(後述)

さらには、天保期から始まった気候変動や異常気象による凶作、さらには貨幣経済の発展による農民の経済的疲弊等で起きた、大規模の百姓一揆。とくに、弘化四年の弘化の大一揆は、ほぼ天草全土に及んだが、その緒戦も北筋であった。

忠敬の測量から162年後の1972年7月6日には、上天草東部で大水害が起きている。この水害は、旧町名で言うと、主に松島町、姫戸町、龍ヶ岳町、倉岳町の4町で発生、多数の犠牲者を出した。地区によつては集落が壊滅したところもあった。

今は天草小唄に謡われているような、長閑な有明海や八代海に囲まれた天草上島だが、このような悲劇の歴史があったことも、時に思いをはせることも大事なことだろう。

島原大変・肥後迷惑

雲仙眉山崩壊に伴う大津波被害

発生年月日 寛政四年四月朔日

(1792年5月21日)

この地変は、伊能忠敬天草測量の18年前に起きた。

地変の概要

島原大変の予兆は前年の寛政三年十月八日（1791年11月3日）に始まった。地鳴りを伴った地震がこの日以降、毎日3〜4回起きる。そして、四年の一月には普賢岳ふもとから噴煙が上がる。更に二月に入ると溶岩流が生れ、下旬には炭酸ガスが噴出、鳥獣が死ぬ現象が起きる。

三月に入ると、震度は5〜6、新しい湧水や地割れが発生。前山崩れの前兆現象が始まっている。そして、三月九日島原大変の際の崩壊の中心部で約200メートルの山崩れが発生した。

そして、運命の四月朔日、酉の刻（19時頃）、地震と共に前山が大崩壊し、津波が数波発生。

だが、夜のことでもあり、人々は前山崩壊による津波とは気づかず、朝になって、前山が崩壊したと分かったという。

この津波による死者は1万5千人に及んだ。

天草郡の様子と被害

「亀川附山方役高田家文書」（意識）によると。

「寛政四年三月朔日、17時頃より大地震があった。この地震は、三月中連続して起きた。九州各地でも同様であつ

た。四月朔日、20時に大津波が起きた。島原城下を始めその近辺、山崩れ・津波により人はすべて死に絶えた程の死人が出た。死人の数はあまりにも多く分らない。天草は、本戸馬場村、広瀬、佐伊津、御領、亀川村、町山口村、溺死者はおよそ30人ほど。栖本組瀬戸、志柿、大島子村、下津浦村、上津浦村下津江、凡そ溺死67人、赤崎村では溺死70人あまり。須子村90人あまり。大浦村でも前に同じ。

大矢野では三カ村で千人ばかり溺死した。そのほかの地でも、同じような被害があつたこのことのようにだ。四月六日記。」

ただ四月六日の時点では、まだ混乱の中にあり、この多数の溺死者は、村人ばかりでなく、流れ着いた流死者も含まれていると思われる。

「寛政四年島原地変記」によると、天草郡の被害として、次のように記している。（意識）

肥後国天草郡は島原対岸の地である。寛政四年四月一日（1792年5月21日）、前山破裂の時、激波18カ村の海岸を洗い、人畜死傷分ならず。当郡は当時島原藩の預かり地であつたので、被災民に一時の救助を行った。四月二十三日、幕府は金四百両を貸与し、また施餓鬼料として別

に銀十枚付与し、流死が最も多かった大矢野村遍照院に於いて、執行させた。島原藩主もまた別に銀五枚を大浦村九品寺に寄付して施餓鬼を執行した。

大矢野島は死屍の漂着が殊に多く、村民は、小児の慈善心に感動して、各々奮い立ちこれを埋葬する。始め有資者は樽あるいは桶等を購入し、裸体の者には古着を着せ、これを埋葬した。だが日を追って漂着は多くなり、ついには樽や衣類が不足し、最後には藁に包み葬ったという。

漂着者がいかに多かったかが分かる。

天草郡被害の概況は次の通り。

- ◇被害 18カ村
- ◇流家 373軒
- ◇損家 352軒
- ◇流馬屋 439軒
- ◇溺死人 343人(男148人、女195人)
- ◇流死牛馬 109頭(牛45頭、馬65頭)
- ◇田畑 65町8反余
- ◇苗代 49町5反ほど
- ◇地船 67艘
- ◇高札場 3か所



- ◇カライモ畑 40町6反余
- ◇見取り田 15町5反程
- ◇郷倉 2カ所
- ◇塩 6610石程
- ◇塩浜 16カ所、20町余

◇刈干して置いていた大麦569石程

◇土橋11カ所

◇平潮に対し2丈5尺から15丈ほど増す

(これは津波高の事と思われる。しかし7・5mから45mは誇張であると思われる)

被災者供養塔

天草には、この地変により、地元民、流死者を含めた被災者の供養塔が数多く建てられ、今なお多く残っている。

筆者が確認しただけでも、上天草市大矢野町 1基、天草市有明町 7基、同佐伊津町 1基、同五和町5基、荅北町4基の計18基ある。

また上田宜珍もこの供養塔を建てている。しかし、寺の本堂の改建の時、残念なことに喪失して現存しない。

この幻の供養塔に関して記すと。

寛政十年四月・島原雲仙崩れの七周忌に会し、当時高浜村へ漂来した7名の溺死体が海岸に仮葬のままであつたので、同村庄屋上田源作は村人に計り、これを隣峰庵境内に移葬して厚く供養し、群霊海会之塔を建てて冥福を祈る。(近代年譜)

文化五年三月晦日 今晚より明朝まで海会塔御供養
江月鑑司和尚もお迎え 庵へ御受け込十七回忌御回有

之 村方より錢百五十匁遣わす・・・(上田宜珍庄屋日記)

文化七年三月四日 白洲へ人骨と見えるものが発見されたので、会所より両3人遣わし、その骨を拾わせ、庵の海会塔に埋葬する。(上田宜珍庄屋日記)

被害者(流死者)が、外洋に面した天草西海岸まで流れ着いているのにも驚かされる。

このように、上田宜珍だけでなく、篤き心の持ち主天草人の手で、天草各地で同じようなことが、行われたことが想像できる。

残されている供養塔の中で、一番大きい塔が、写真の荅北町富岡・西生庵跡地に立つ供養塔である。

荅北町の供養塔 寿覚院西生庵跡

「両肥溺死萬霊等」

寛政七年四月十日、三年忌 建立

両肥とは肥前と肥後の意。塔が等になっている。

天草近代年譜には、

寛政七年四月十日 島原雲仙崩れによる津波溺死者の三年忌に付き、富岡にては寿覚院末庵西生庵の境内に、大なる自然石の万霊塔を建碑し、是日懇ろに追善供養す。

と記されている。

方位（風向）について

現在、方位は東西南北で表すが、江戸時代は、東西南北も使用していたようだが、子丑寅の干支をも用いて方角を表していた。したがって、古文書を見ても、俄かにはどの方角か理解できない。

測量日記には、風については記載がないが、巡廻日記には度々風の向きが記載されている。その方角は、東西南北と干支の両方を用いている。例えば、10月30日には「西風烈シ」、11月3日には「戌亥風強」、11月5日には「北風強」というように。ただし、干支を使った風向は1カ所のみで、後は東西南北を使用している。また、11月20日には「あなせ風強し」と異称も使われている。

という事は、一般的に東西南北が使われていたようだ。上田宜珍庄屋日記には、風向が毎日のように記されているが、こちらも東西南北を使っている。

